

# 本当の「先生」!!

佐藤 瑞彦

## 一 八十二歳の先生!!

私の存じている方で、八十二歳で、元氣、若い娘さんたちと伍して、〴〵大好きですわ」とおっしゃりながら大田区の私立幼稚園で正式の教諭として働いていた方がありました。

この場合は、その園長さんもえらかったと思います。その老先生の希望を容れて、実際にクラスを担当しての毎日の保育実務に当たっていたのでしたから……。幼稚園教育所定の保育課程をば、若い娘、そのけ……の心組みで、まことに愉快そうに楽しく、なんでもお出来になっていたのでした。

長年幼稚園教育の現場に在って、本当にこれのみが、この老婦人の生きが이었다のです。あたりまえのことかもしれませんが、教えられている子どもたちも、ことのほか、この先生が大好きで、ほとんど片時も離れたがらないほどの接触ぶりでした。

しかも、この老教師、家庭もちの方で、立派な子どもさんが

三人もお在りでした。みな、それぞれに社会人として立っておられ、もちろん、お孫さんたちもおられました。八十二歳とは見えない色艶のいいお顔! 何よりも眼がきれいな方でした。声の美しさも、全く年齢を思わせませんでした。

## 二 公正に愛する

なにか、この先生に備わっていましたか!! もともとこの方は地方の女子師範の卒業生で、はじめっから幼稚園の先生として就職なさいました。

この方を親しく見ていて強く感じさせられたことはいくつかございます——。

第一は、本当に子どもを正しく愛そうとなさっておられたことです。自分の好みの狭さに、子どもを見る目を屈折させまいと努力しておられたことです。言葉を代えていうならば、子どもたちを公正に見てゆこう……となさったことです。そしてこの老婦人の結論としては、〴〵どの子にもどの子にもピカッと

光るものがあるんですよ。ダイヤモンドがございますもの。どのお子さんからも、この光るものを見つけ出してあげなければ……と思いました”というのです。

幼児はその成長の過程において、こういう先生に受け持っていただけなら、どんなに幸福でしょう。この人について見ても、教育学的には決して蘊奥をきわめておられたとは、どんなに、鼻屑めに見ても言い切れはしませぬ。しかし、そういうものを越えて、どうかして子どもから光るものを見つけ出そう……という真剣な希求がいつもこの人をふるい立たせていました。

田辺元博士が、いつか私に仰有いました——『私の子どもが小学校二年生で自転車を買ってほしいというので買ってやりました。大喜びで、すぐさま乗り始めました。うまくは乗れないのです。そこで私は、この子に重心原理を説き開かせ、力の均衡を説き、やってごらん……』とやってやらせましたが駄目です。子どもはとうとう、お父さま！ 乗って見せて”といます。やって見ました。駄目でした。原理・学理では立派に説明が出来ても、さて、実際に乗って見ますと乗れないのです。……子どもは笑いました。やっぱり駄目？ ぼく、自分で乗る！”と。幾度か、ころげ、幾度か倒れて、とうとう自得しました。完全に乗れるようになりました。私の場合、”哲学はパンを焼かず”でしたよ”と。

私は、この時の、むしろ愛に充ちた田辺博士のお顔を忘れることができません。

畢竟は、育児は学理ではなくてボディ・タッチなのです。

### 三 本質を見る

第二に、この老教諭から感じ採ったことは、”子どもを可愛がるということとは、感覚的なものではなくて、本質的に人を愛するということ”だったことです。

子どもの顔容がかわいいか、話っぷりが愛くるしいとか、動作がなんともいえずかわい……とかいうのではないのです。人間を愛護しておられたのです。人間をどう見れば、それを愛護するということになるのでしょうか？ 理屈ではなくて、そこに愛してゆかなければならない人としての大切な要素があるということです。それは、なんでしょうか！

毎日が新しい……ということです。それはなぜでしょう！ 成長があるからです。停止してはおりませぬ。草花の芽がいきいきとおおきくなってゆくように、毎日々々成長してゆく。どうして、そのように成長してゆく、素直に信じて受けとるからです。幼稚園の子どもたちは、微塵も先生のおっしゃることに疑いをさしはさみはいたしません。

あのククリクリした澄んだ眼が、全く絶対の信頼をもって、先

生を見つめ、その示すところ、語るところに、本当に素直に受け容れることをしています。そのまま、吸収されてゆきます。些の反発も、抵抗もないのです。

こういう子どもたちを見ると、この老先生は、それを人間の本質であると感じていきます。そこに言うことの出来ない愛をおぼえるのです。

結局、昨日までの子ども達の業績にはつかまえられずに、今日のいきいきした成長の新鮮さに目を、心をつよくつよく惹きつけられるのです。ここは、あの「英雄論」（これは土井晩翠が、訳してこういう標題になっていますけれど原著名からは、ちよつと距離があります。）を書いたトマス・カーライルの日常のモットオとした言葉に通じるものがあります。もとよりこの老先生は、カーライルを知ってはいらっしゃらなかったと思います  
が……。

カーライルは、人の評価（人ならずとも……）はTO・DOではない。やった業績ゆえに評価されるものではない。TO・BEである。その人が、どうあるか……で定まる……と言っています。私は、このカーライルを知るために、彼が総長をしたエジンバラ大学まで参りました。スコットランドの古都エジンバラは私の心を強く捉えました。子どもの評価も、TO・DOではない。今日、この子どもはどうあるか？ TO・BEで定ま

るのです。

いわんや、その子の親が誰であって、その本職はなんであるか……などで、その子を評価することは、本当にその子を愛するという評価からははるかにはるかに遠ざかってしまいます。

私たちの前にいるのは、独自の価値を有つ子どもです。しかも、毎日々々瞬時も休まず止まらずに成長している“人”です。これを扱うものも、厳肅に“人”として考え扱う本質の上に立っていないければなりません。

#### 四 教育の秘義

第三は、この老先生！ 叱らずに喜んであげる先生“だった”ことです。

先生がたの中には、矢鱈に子どもを叱る人もおりましょう。小言、叱りで綴られる教育ほど非心理的なことはありません。効果はほとんど無（ゼロ）でしかないでしょう！

この老先生は、ほとんど、子どもをお叱りにならなかった。むろん怒りはしなかった。これほど、はつきり、ちがいがあるのに、これほど混合されるものはありません。叱りと怒りとは全くの別ものです。これを弁えない人は、先生でも母親でも、徹頭徹尾、怒りまくっている。もはや、叱りではない。叱り……は本質的に昂奮を伴わないものです。怒りは昂奮で発して、

昂奮で終始する。傍から見てこれほど滑稽なことはない。むしろ「あわれ」にさえ見えてくる。怒りの発生は、同時に教育の放棄につながります。

私たちは、どんな場合にも、教育を放棄してはなりません。

怒っては放棄です。この老先生は、どんなことがあっても、怒らなかつた。そしてほとんど子どもをお叱りにはならなかつた。すると、叱りのない教育はないと思っている人には、そんな馬鹿なことであるもんですか！」と扱われる。でも本当に「叱り」はなかつた。この老先生に在ったものは「喜んであげる」ということであります。

子どもが一生懸命努力して、その子どもなりに成功したとき、この老先生は本当にそれを喜んでやりました。抱きあげてほおずりもなさいました。

「よかつたわねえ、あなた、出来たんじゃないの……。本当にうれしいわ、よかつたわねえ……。このボディ・タッチは、そのまま、ハート・タッチです。われとわが目、わが身体、わが心で、自分のためにこんなにも喜んでくださっている先生を見て、感じて、触れて、うれしくならない子どもはいませぬ。

うれしい。うれしいのです。そうしてどう思うのです！

「ようしッ!! ぼく、また一生懸命やるぞ!」 わたしうれしいわ、もつともつとやるわ!」と思うにちがいませぬ。

この老先生は、ここのみ教育の秘義があることを長年の体験で、しと感得されていられました。

## 五 全幅的に作用する

私に二人の孫がいます。靖子（五歳）欣彦（四歳）。一緒に近くの幼稚園に仲良く、たのしげに、励んで行っております。坂井田先生がおっしゃったわよ」といって、先生のおっしゃることがオールマイティです。この二人の小さい「人間」はほとんど毎日のこの幼稚園の先生方によって創られています。私は、とても尊貴なことだと見ております。子どもたちのTO・BEに全幅的に作用しておるのです。こういう両者の関係こそ、本当の教育なのです。

若い方々で、現に幼稚園の先生としておられる方々!!

定めし皆さん、みな、そうであるとは思いますが、「一人の人間が、全幅的に作用し得る」教育の状態は、一生を通じて幼児期だけであるといつても決して過言ではない厳肅さをお思いになつて、それこそ、その子にとって一番よい先生におなりくださいませ。

盛岡幼稚園長